

コルナイ・ヤーノシュ著・盛田常夫訳  
『コルナイ・ヤーノシュ自伝－思索する力を得て』

(日本評論社, 2006年, xviii+417+42 pp.)

佐藤経明

本文417ページに及ぶ本書の書評を書くのは、至難の業である。単に大部というだけでなく（それなら別に難しくはない）、何よりも本書が並みの自伝ではないからだ。

1928年1月21日、ブダペストで裕福なユダヤ系ハンガリー人の家庭<sup>1)</sup>に生れた著者が戦前・戦中・戦後にかけて激しく揺れた時代の回顧と裏合わせに社会主義の「命運」を「内側」から辿る苦渋に満ちた回想録だが、それはまた「コルナイ理論」の形成史でもある。後者はそれ自体が一つの本格的な論文の対象となり得るものである。

本書がカバーする時代には、第二次大戦、戦後の社会主義体制の成立、1956年のスターリン批判とハンガリー動乱、68年の「プラハの春」とその圧殺、80年のポーランド「連帯」成立から89年の社会主義体制の崩壊、体制転換に至る全ての時期が含まれ、かつ戦後、共産黨員として活動した著者がマルクス主義から離れる思想的ドラマがそれと不即不離の関係で語られる。書評が容易であるはずがない。満遍なく議論することは全く不可能である。

書評に当たりどのような接近方法をとるかに随分悩んだが、幸か不幸か、評者は著者と殆ど同じ世代に属し<sup>2)</sup>、また戦後東欧と戦後日本では方向こそ異なれ同じ戦後再建過程を経験、知識人のマルクス主義受容と離反でもかなりの共通性ないし類似性がある。さらに評者は1964-65年に初めて旧ソ連・東欧を訪れて以来、しばしば訪問滞在、これら諸国の経済学者には知人が多い。とりわけ本書に出て来るハンガリー人経済学者の名前は筆者には極めて馴染み深いものがある。そこで評者自

身の回想と重ね合わせながら、書評を進めることにした。なお、この書評論文は、理論部分も含め評者が予定している回想「比較経済体制論の過去・現在・未来」(仮題)の一部となりそうである。

I.

評者がワルシャワ<sup>3)</sup>、プラハ<sup>4)</sup>、ウイーン経由でブダペストを初めて訪れたのは1965年2月中旬であった。

文字通り最初に会ったハンガリーの経済学者は当時、資材・価格庁長官のチコーシュ・ナジ・ペーラ<sup>5)</sup>であった。当時、バジリカ近くの価格庁で議論、午後4時を過ぎたら彼は立ち上がり「秘書たちが帰りがっているから夜8時に君のホテルに行く。夕食に招待するからそこで議論を続けよう」ということになった。ホテル・ロイヤルでの議論は深更に及んだが、こんな対応はソ連は勿論、ワルシャワ、プラハでもなかったから、「カーダールのハンガリー」に対する評者の第一印象はここで形作られたといってもよい。彼ばかりでなく、ナジ・タマーシュ、後に自殺したコメコン専門家、アウシュ・シャーンドル<sup>6)</sup>の話も当時の枠組みギリギリの率直なものであった。評者がコメコン統合はソ連からでなく、東欧の小国から見なければならぬことを早くから理解したのはアウシュのお陰である。

もう一つ、この文脈で付け加えると、本書にはフリッシュ・イシュトヴァーンの「二重人格」性がたびたび出て来る。1971年秋、私がブダペストからブカレストに向かうが、まだ「受け入れ」確認を受け取っていないことを知った、経済研究所

長（当時）のフリッシュは、「ウム、少しお待ちなさい」と私を待たせて秘書にルーマニア世界経済研究所長宛の紹介状を口述、署名して渡してくれた。それには「われわれは佐藤氏をまともな経済学者と見てこれこれの処遇を与えた。貴方でも同様の処遇を与えることを望む」とあった。私は感動し“*Ich hoffe, dass Sie immer ‘frisch’ bleiben*”（*I wish you to remain always ‘fresh’*）を別れの挨拶とした。ブカレストでは「フリッシュのこれだけの信頼を得るとは」と驚きながらも、党中央委に問い合わせるということで、待機している間に滞在期間は過ぎた。

同じ1971年のことだが、書店のショーウィンドウに党から除名されたルカーチ派の社会学者、マルクス・マリーアの本が置いてあったので「おや、まだ置いてあるの」と聞いたら「当たり前だ。再版はしないが、初版が売切れるまでは置いておくのがカードール主義だ」という返事であった。

私はカードールが1963年、「われわれに反対しないものはわれわれの味方だ」と、スターリン主義の「われわれに組みしないものはわれわれの敵だ」を逆転させた有名な「転換」後のハンガリーしか知らない。このため私のハンガリーに対する見方がいささか甘くなっているかも知れないことは自覚しているが、後述するようにコルナイの「カードール時代」に対する見方はいささか厳しすぎるという感を抱かずにはおれない。

さて、ブダペストのギムナジウムがいかに多くの世界的な天才たち（全部といってよいほどユダヤ系だが）を輩出したかはマルクス（2001）に詳しいが、コルナイはコスモポリタンのでリベラルな在外ドイツ人学校（*Reichsdeutsche Schule*）<sup>7)</sup>で学び（同級には1956年ハンガリー動乱後処刑されるギメシュ・ミクローシュがいた）、ついで「保守的」なハンガリーのギムナジウムに移った。家庭環境と並んで、ここでの教育水準がいかに高かったかは一読明瞭である。コルナイは正規の大学教育を受けていない。ギムナジウムで受けた教育と自分で獲得した教養とが、彼の知的財産を成している。これは特筆すべきことだろう。この時期にはまだ格別のユダヤ人差別・迫害を受けていないことも重要である。

## II.

本書を一読すれば明らかなように、著者にはいくつかの「転機」がある。すでに戦争は始まっていたが、「同盟国」として比較的「自由」だったハンガリーに1944年4月、ドイツ軍が進駐したことから「1944年のトラウマ」が著者のその後の運命を大きく左右することになる。これが「第一の転機」である。単に父親がアウシュヴィッツで命を落とし、兄が動員先のドン河地方で死んだばかりではない。16歳の著者自身もドイツ軍進駐とともに始まったユダヤ人迫害からいかに逃れるか「決断の年」となったからだ。ここで戦争末期、ハンガリーで多くのユダヤ人を救った伝説のスウェーデン人外交官、ラウル・ヴァーレンベルグ（スウェーデン語読みでは「ヴァーレンベリ」）の名前が出て来るのは極めて興味深い。

「1944年トラウマへの反動」（p. 24）として著者はユダヤ系を含む多数の知識人と共に共産党に入り、党専従活動家（著者の言う「第五段階」、p. 23）まで登りつめる。知識人のマルクス主義への傾斜は、大恐慌とファシズム、第二次世界大戦、戦後危機を経験した数世代に共通するもので、洋の東西、西欧と東欧、アメリカと日本とを問わない<sup>8)</sup>。著者も評者もこの世代の最後に近いグループに属する。敗戦から半世紀以上たった1998年に書いた拙文の締めくくりはこの「特別な時期」の雰囲気はいささか伝えていると思う<sup>9)</sup>。だがハンガリーの場合、亡命先から帰国した「ボリシェビキ」を含め、初期の指導的党员には確信的な共産主義者ではあっても、「キャリアリスト」でない教養人が多かったのが目に付くように思う。前出のフリッシュもその一人だが、レーヴァイ・ヨージェフについての言及も興味深い<sup>10)</sup>。また党内では「ユダヤ人というアイデンティティ」（p. 26）を殆ど意識せずに済んだことも無視できない。

コルナイの入党は早くも1945年晩秋である。評者が旧制六高の友人たちと共産党倉敷地区委員会を訪れたのは1946年1月中旬だったと思う。しかし、戦前、印刷工だったという青白い地区委員の最初の言葉は「君たち、何時、学校を辞めるんだい」だった。戦前、左翼学生が学校を辞めて労働運動に入って行ったイメージを持ち続けていたのである。いささかの「違和感」が残った。

さて、著者は1940年代末-50年代初めの「粛清事件」には遠く日本にいたわれわれほどにも疑問を感じていないが<sup>11)</sup>、経済ジャーナリストとして「社会主義」経済の実態に触れたことが後の大きな財産となる。これは当時、われわれには及びもつかないことだった。「覚醒」は1953年のスターリンの死で始まり、これはわれわれが経験し得なかったことだが、長期投獄から釈放された年上の知人との再会が大きなショックとなる。共産主義イデオロギーからの「非幻想化」の過程がここで始まり、最後まで追求されることになる。1956年のスターリン批判が大きな画期となるのは、洋の東西を問わない。このあたりから著者の「第二の転機」が始まる。

このあたりは評者とも共通する。ただ、2点を付け加えておきたい。評者たち草創記「全学連世代」はいわゆる「1950年問題」のなかで「クレムリンの苛酷な論理」を垣間見、ついで1951年-54年末の日本共産党「軍事方針」<sup>12)</sup>で決定的に離反、「こんな時には勉強しているに限る」(佐藤, 1981)という道を選んだ。「政治的」離反が思想的・理論的再検討への道を開いたと言える。

評者はイタリア共産党「構造改革」路線に親近感を持つようになっていたが、1955年、「現物タームの経済計算が可能かのようなエンゲルスの謬論」を激しく論難したイタリア共産党の経済理論家、ルチアーノ・バルカの指摘は社会主義経済にそのまま妥当するように思われた。1956年スターリン批判の受け止め方では、「問題は体制そのものにある」と指摘したトリアッチに完全に組していた。

しかし当時、東欧の改革派経済理論に直接、触れる機会は無いに等しかった。コルナイよりも先にブルスの名前を知ったのだが、それは奇妙なことにソ連のアカデミー準会員エリ・ガトフスキーが党機関誌「コムニスト」に書いた論説からで、「ポーランドにはこんなけしからぬ修正主義的議論をする連中がいる」という趣旨だった。「これは何事かあらん」と強い興味を抱いたのだが、幸い評者は過去のサナトリウム生活の「お陰」もあって大学入学時、英独仏が読めていたので、西欧の *Osteuropawirtschaft*, *Revue d'etudes comparatives Est-Ouest* 誌などでそれらの要訳、紹介に接するこ

とが出来たのが大きかった。同じ頃、「社会主義における労働力の非商品性」命題を批判したポーランドの女性経済学者、ゾフィア・モレツカの論文も目に留まった。ブルスの「分権モデル」論を纏めた『社会主義経済機能の一般的諸問題』のポーランド語原書が出たのは1961年、その英訳が出たのは1972年だが、評者はその骨子を50年代末までには承知していた。評者はブルスの国有セクターにおける「貨幣の受動的役割」という概念は、コルナイの「ソフトな予算制約」に先行するものとして高く評価している。同じ頃1956年にパリで出たチェスワウ・ボブロウスキの著書<sup>13)</sup>はわずか91ページの小冊子ながら光彩に満ち溢れた本で、ソ連型モデルに内在する問題の所在を完膚なきまでに明らかにしていた。

### III.

さて、ハンガリーにおける「ブハーリン主義者」ナジ・イムレ(1956年動乱後、処刑される)を支持したことから著者は同じグループと共に1955年4月、「自由な人民」編集局から追放され、研究生生活に移る。博士候補準備生としてはナジ・タマーシュの指導を受けたことと、政府中央統計局長でありながらハンガリー経済改革思想の「伝說的」な先駆者、ピーテル・ジョルジュ(1969年に不可解な死を遂げる)の知遇を得たことから著者の「第二の転機」が本格的に始まり、翌年のハンガリー動乱で決定的となる。25歳年長のピーテル・ジョルジュは著者にとっていわば「精神的な父」<sup>14)</sup>の役割を果たしたようだ。

著者の博士候補論文「経済管理の過度中央集権化」が出版されたのは、ハンガリー動乱まさに前夜の1956年9月である。「二重人格」フリッシュの同意も得て1958年にオックスフォードから出た英語版 *Overcentralization in Economic Administration* に接した時の感動を、評者は今でも忘れることは出来ない。ブルスの著書の英語版 *The Market in a Socialist Economy* が出るのはかなり遅く1972年だから、西側経済学界に与えた衝撃はコルナイのほうが大きかったということが出来る。また、コルナイが経済ジャーナリスト時代の経験を活かし、軽工業の実態調査から議論を展開しているのは、本質的に純理論的なブルスよりはるかに説得力が

あった。「計画経済における投機」などは、この時からわれわれに馴染みの深い用語となった。

ハンガリー動乱当時の著者の立場と行動はいくらか「両義的」である。ナジ・イムレ政権のプログラム（経済部分）の執筆を引き受けているが（この時、チコーシュ・ナジが執筆引き受けを申し出たのは極めて興味深い）、他方では「動乱」を「革命」と呼びながら武装蜂起者の側に決然と立つことには何か「釈然」としないものを感じている。

このあたりは極めて正直だと思う。おそらく当時、多数の知識人は同じ心境にあったのではなかろうか。評者の永年にわたる知人でも、当時のことを率直に話してくれた人は皆無に近い<sup>15)</sup>。動乱の実態に即して考えると、評者もこれを「反スターリン主義革命」と単純に礼賛する気持ちにはなれない<sup>16)</sup>。

この点では著者と極めて大まかな一致があると思うが、ギムナジウムからの親友、ギメシュ・ミクローシュの殉教者的な死があるとしても、動乱後のカーダール時代に対して著者がいささか厳しすぎるという感は覆い難い。ナジの処刑に対しても、「過剰報復」に対しても、カーダールが最終的な責任から逃れられないのは事実である。しかし、1963年の有名な「転換」後、ほぼ30年近く「東欧で日の当たる小島」を維持した事実、全部ではなくともこの「債務」の大部分を返したと言うことは出来ないだろうか。

著者も書いているが（p. 95）、評者も確信するところでは、支配政党と資本主義国の野党とを問わず、共産党内権力の苛酷なハシゴを上がるのは「良い人間」には出来ない。稀にドゥブチェクやゴルバチョフのような「突然変異」があるが、「セカンド・ベスト」がトップの座に着けば「最善」と考えるべきだろう。カーダールが「セカンド・ベスト」だったかは微妙なところだが、「転換」以後の実績から判断すれば、それに近かったと言えないだろうか。

評者が最初の訪問当初から聞かされていた「カーダールはハンガリー人の背骨を折ってから緩和策に転じたのだ」というのは疑いもない事実である。だが、それはチェコ軍事介入の前夜、カーダールが国境会談でチェコスロヴァキアのドゥブチェク党第一書記に「いったい、どんな連中を相手

にしていると思っているのか<sup>17)</sup>と言ったような苦く厳しい現実認識から来ていた。

ともあれ、1955年末にはすでにマルクス主義を「諦め」ていた著者は動乱後、研究所から追放され保安機関からも長い尋問審査をうける。この尋問との闘いについての迫力ある記述は、友人たちの告白が尋問に利用されている様子とあわせ、読むものに牢獄を垣間見るような強烈な印象を残す。そして一旦、解体された共産党が再組織（ハンガリー社会主義労働者党）されたのに再登録しないことで、著者の「第二の転機」は完結する<sup>18)</sup>。

だが、ここで先回りして著者が書いている（pp. 167-180）情報機関協力者の問題に触れておこう。バーチカイ・タマーシュが情報機関協力者だったという事実は、著者ばかりでなく評者にとっても大きな衝撃だった。英語が達者なバーチカイは評者を含め西側経済学者との「窓口」になることが多かったからである。「モンテアス事件」にも驚愕した。最近ではハンガリーを代表する映画監督、サボー・イシュトヴァーンも情報機関協力者であったことが明らかにされた。先には大蔵省官僚当時、協力者であったことが明るみに出て首相を辞任した、フオック・イエネーの例もある。だが、この問題に触れた人は皆無に近かった<sup>19)</sup>。評者は30年前、カーダール主義も「核」はソ連型社会主義と同じだと書いたことがあるが<sup>20)</sup>、体制転換後明るみに出た事実は評者の想像をはるかに超えるものがあつた。

さて、この時期を終えた当時、著者はいくつかの重要な決心をするが、その第一は亡命しないこと、第二は政治に金輪際関わらず学問研究に専念すること（後で触れる著者の「ナイーヴな改革者」という概念はこれと多分に関係がある）、そして第三は「西側の経済学の一員に加わりたい」ということだった。評者が瞠目感嘆するのは、「決心」自体よりもそれをその後の長い年月、守り通して目的を達成した執拗さと首尾一貫性である。結果としてわれわれは「社会主義体制」の完璧に近い政治経済学的「解剖学」を受け取ることになった。著者が反体制運動に組して途中で挫折するか、あるいは亡命を余儀なくされた場合のことを想像すると、われわれがこの時の著者の選択に負うところは誠に大きいと言わなければならない。

紙数の関係上、ここからは少しはしよった議論をしなければならない。その第一は「ナイーヴな改革者」（“naïve reformer”，初出は p. 92）という概念である。この概念はかなり重層的に使われている。

第一は「社会主義経済の改革可能性を信じる人」という意味である。「過度集権化」当時の著者はまだこれに属していたが、ハンガリー動乱を境に著者はこの時代に別れを告げる。体制転換後、「このシステムは改革不能であることが分った」という言葉を評者は旧ソ連・東欧の改革派経済学者からどれだけ聞かされたことだろうか。

評者自身はどうだったかという、1968年のチェコ軍事介入後、改革期待を捨てて<sup>21)</sup>反体制派に主な関心を転じたが、80年代半ばのゴルバチョフ・ペレストロイカ、ハンガリー経済改革の「新しい波」、中国の経済改革の展開で期待を復活させていた。

第二は上記に基づいて、「政策提言」ないし「助言」を行うことである。殆どの改革派経済学者はこれに属していた。著者がいくらか好意も込めて言及している、アンタル・ラースローはその典型である<sup>22)</sup>。

評者はどうだったかという、政権与党に助言する立場には勿論なかったが、「60年安保」後には野党・社会党の構造改革派「江田グループ」ブレインの端っこにはいた（日本経済新聞「社会党―ブレイン人脈の研究」1989年8月6日号）。しかし、これも社会党の西欧型「社会民主主義宣言」と言うべき「新宣言」の採択（1985年）で終わった。

第三に、以上から著者は東欧の代表的改革派経済学者、ブルス、オタ・シークを始め殆どの改革派をこの範疇に入れている（p. 281）。これには若干の補注が必要であろう。

「プラハの春」が潰えた後、「第三の道」（“Der dritte Weg”）を唱えたシークに関しては異論はない。「社会主義」に代わるものは「資本主義」しかないという現実的歴史的な認識に反するからである。思弁の世界にしか存在しないような、様々な変種の「市場社会主義論」<sup>23)</sup>もこのうちに入るだろう。著者は最近の論文（Kornai, 2005）でこの問題を敷衍し、世界史の発展を「二つの基本方向」、「資本主義の拡大」と「政治的民主化」から説き起

している。評者が社会主義の「成立」と「崩壊」を「資本主義発展の『中断』と『再開』」（佐藤, 1997, pp. 64-65）<sup>24)</sup>というタームで考えてきたのもこれに近い。

「ナイーヴ」という用語は殆どの「体制内改革派」に適用できるだろうが、ここでは二点、保留しておきたい。第一に、評者は永年、旧ソ連・東欧諸国で多数の体制内改革派と知り合ったが、「絵に描いた」ような「ナイーヴな改革派」は殆ど存在しなかった。「ナイーヴ」な人たちもチェコ軍事介入後には「ナイーヴ」でなくなったのが圧倒的多数だった。そして「東欧革命」直前には評者を含め多くが「体制転換」を視野に入れ始めていたことはほぼ間違いない。

第二は、体制内改革派の努力なしに体制転換が実現できたろうか、という疑問を呈しておきたい。反体制派として突出することもなければ、体制内改革派が行ったような「助言」にも加わらなかったという意味で、著者の立場は極めて特異である。しかし、全てが著者のような立場を取ったら、1989年のハンガリーにおける平和的な体制転換はあり得たであろうか、とも思わざるを得ない。「市場志向」の改革を長年月、続ける中で支配政党の多数派がマルクス・レーニン主義的将来社会像を放棄、実質的に社会民主主義的将来ヴィジョンを取るようになったことなしには、支配政党がみずから複数政党制容認、党名変更を宣言することで体制転換の口火を切ることはあり得なかったであろう。

評者が参加した国際会議で言うと、「東欧革命」前年1988年12月、ウィーンにおける会議の名称はすでに“Plan and/or Market”<sup>25)</sup>であった。次いで翌年、IEA 主宰で1989年3月モスクワで開かれた国際会議“Market Forces in Planned Economies”<sup>26)</sup>はその名称からは窺い得ないような理論的ブレークスルーとなった。

ブルスがかつての「分権モデル」を逆転させ「投資を中央が握っているからこそ市場機構が作動しないのだ」と資本市場を含む全生産要素の市場化を提唱した（Bogomolov, 1990, pp. 16-31）。「全生産要素を市場化せよ」―これがブルスのメッセージであった。

コルナイは「所有」と「経済調整メカニズム」の「親近性」（Affinity）という角度から、「公的所

有はいくら改革しても官僚統制に馴染むし、私的所有は本来、市場機構に馴染むから、市場機構を作動させようとしたら私的所有を思い切って拡大するほかはない」と主張した。ここには80年代改革に対する著者の悲観的な見方がにじみ出ている。「私的セクターを思い切って拡大せよ」これが体制転換直前のコルナイの到達点であった(Bogomolov, 1990, pp. 32-54)<sup>27)</sup>。

「全生産要素を市場化」し「私的所有を思い切って拡大」した経済体制は、現実には資本主義以外に無いことは、容易に理解できよう。この時点ではブルスはもはや「ナイーヴ」ではなかった。著者の「ナイーヴ」という概念は余りにも広すぎるように思う。

評者はどうだったかという上記の会議では、「所有」でも「計画・対・市場」のタームでもなく、「体制のいかに問わず普遍的な市場経済に対して行使されるマクロ経済的制御の『質』に経済体制論の問題は移行しつつある」と論じた(Bogomolov, 1990, pp. 253-260)<sup>28)</sup>。評者もまた注21の評者ではなかった。理論的表現ながらみな、「体制転換」紙一重の議論を展開していたのだった。ただし、半年後の「東欧革命」による社会主義の崩壊を予想していたのは、コルナイを含め、誰もいなかったと思う。

#### IV.

評者が帰国したのは89年4月4日であったが、その1月半後、社会主義経済学会福島大会(5月19日-21日)幹事会で学会名称を「比較経済体制学会」に変更することを提案したのには、上記のような経緯があった。「東欧革命」後に提案したのではない。

評者が確信するところでは、「社会主義経済学会」というのは「社会主義経済」を研究対象にする学会であって「社会主義者」の学会ではない、研究対象が「社会主義」ではなくなりつつあるのだから学会名称の変更は当然だ、ということであった<sup>29)</sup>。しかし、こういう自然な考え方は多数の人たちに理解されなかったようだ。およそ「社会主義」の体制認識が現実からはるかに立ち遅れていたわけだが、これは「不勉強」であったか、伝統的社会主義イデオロギー(基底還元主義)に囚

われていたかのいずれかであろう。

評者は佐藤(2000, p. 9)のなかで、当時のわが学会の「汚点」とも言うべき「悪しき政治性」に厳しく言及しておいた。そこで評者が引用している、学会長老であった故・副島種典の故・岡稔さんに対する学問以前の攻撃(「批判」ではない)は、政治的文脈抜きには到底、考えられないものであった<sup>30)</sup>。

われわれの学会がマル経学会である経済理論学会の“Appendix”として生れた事情からしても、当初、会員に政治色の強いマルクス主義者が多かったことは公然の事実である。学会名称変更4年もかかったことは、これらの人たちに「負う」ところが誠に大きい。これらの人たちは今、どう考えているのか、本書(およびこの拙論)を素材にして自らの「軌跡」を再検討して欲しいと思わないわけには行かない。それが自分に対する学問的誠実というものであろう。

最後に、四点だけ走り書きしておきたい。

第一に、著者はいくつかの個所(p. 341その他)で「マルクスに学んだ」ことに触れている。「全体制論」的な見方はその第一である。評者も全く同感だが、付け加えるとすれば、評者はマルクスから何よりも「矛盾の論理学」を学んだと言いたい。「資本論」から学んだのは第一にこれであった。

第二に、著者は「社会主義」の政治も含む「全体制論」を提供してくれたが、資本主義については「多種多様」(p. 392)を認めるのみで、体制転換後の「失望」<sup>31)</sup>に応えるような批判的分析をしているわけではない。

著者はまた別の個所(p. 196)で「資本主義『擁護』」にも触れている。「現存した社会主義」(塩川, 1999)<sup>32)</sup>に対しては資本主義が「擁護」されるべきことは論を俟たない。でなければ体制転換は無意味ということになる。しかし、そのことは「現実に存在する資本主義」をそのまま擁護することではないだろう。著者は評者が注27で触れているような「ジレンマ論」から「われわれは高々、病を選ぶだけなのだ」(p. 393)と書いているが、これはKornai(1983)以来の著者の持論で、ここには抗い難い「苦い真実」が含まれていることは否定できない。しかし評者は、それにとどまらない比較経済体制論の困難だが未開拓の領域がここ

に広がっていることを指摘しておきたい<sup>33)</sup>。だが、資本主義の分析はそもそもの最初から著者が自分の課題としたことではなかった。ここに著者の「本領」があった訳ではないことを忘れるべきではない。

第三に、本書を読了して多数のハンガリー経済学者の名前が引用されている一方、言及されてしるべき人で名前が上がっていないのが少なくないことに気がついた。読者は多彩なハンガリー経済学者は本書で言及されているのに止まらないことに留意すべきだろう。評者は「言及」されていないことの意味も考えざるを得ない。

第四に、著者はマルクス主義者が強いられる「悲痛な後退戦」(p. 80)に触れている。先に触れた学会名称変更に対抗した人たちはこれを切実に経験したのであろうか。それを率直に語るべきだろう。しかし、評者はそれとは別の「アナロジー」で過去半世紀以上、社会主義の改革の流れを追って来た評者の「密かな感懐」を次のように書き残しておきたい。「社会主義の市場経済化というのは『死にいたる病』(キェルケゴール)のようなもので、際限のない、そして勝ち目の無い後衛戦の連続を見続けて来た」(佐藤, 2005)というのが、それである。

本書に見る著者はやはり一つの大きな「時代の子」であった。ひとは「世代の運命」の大きな枠から逃れることは出来ないが、それと「苦闘」することは出来る。そのことを本書は見事に示してくれている。評者が著者に共感する大きな理由もそこにあることは、この拙ない書評論文から容易に読み取られることであろう。

(横浜市立大学名誉教授)

## 注

1) 「コルンハウザー」(Kornhauser)という姓を著者は1945年に「コルナイ」と変えている。著者が少年時代に買ってもらったカメラ(pp. 4-5)の名称を問い合わせたら Contax III だったが、評者はクラシック・カメラを趣味とするのでその「意味」が良く分る。

2) 評者は1925年4月23日の生まれだが、旧制中学3年当時、2年余り結核サナトリウムで過ごし「実生活」から離れていたもので、実質的には同じに近い。評者は短い回想「私の八月十五日」(『神奈川新聞』1983年8月15日)で書いたことがあるが、43年12月の「学徒出陣」世

代を典型的戦中派とすると、昭和の年号が満年齢と一致する評者の世代は「遅れてきた戦中派」で、前者ほどにも戦争には間に合わず、さりとて少し後の世代ほどには軍国少年となれなかった中途半端な世代である。評者の場合には43年2月初めほぼ同時の「スターリングラート戦終結」「ガダルカナル島撤退」で敗戦を予想、それなりの勉強を始めていた。

3) 1956年当時のポーランドは「10月の春」で東欧自由化のフロント・ランナーだったが、評者の訪問当時にはゴムルカ体制はすでに保守化に転じていた。グランド・ホテルではショパン・コンクールに来ていたピアニスト、中村絃子と夕食を共にした。ついでに触れると、ブダペストでガルシア・ロルカ「血の婚礼」を観た時には、2列後ろの席に28歳の夫人を同伴した82歳のコダーイ・ゾルターン(その2年後に死去)を見かけたことも忘れがたい。

4) 「プラハの春」への胎動がすでに始まっており、経済改革案を決定したばかりだった。経済研究所副所長・カレル・コウバ、学術書記・チェストミール・コジュウシニーク、イジー・コスタ、のちに70年代ウイーンの国際比較経済研究所(WIIW)初代所長となる故・ベドジフ(フリートリヒ)・レフチークその他多数の経済学者と知り合ったのは、後々まで評者の知的財産となった。レフチークは死去の2か月半前、WIIW 創立25周年記念シンポジウム(Nov. 11-12, 1998)冒頭スピーチで、弱弱しい声ながら次のように語った。“I'm particularly happy that my personal friend for what is now over thirty years, Professor Sato, who followed our preparations for the introduction of deep economic and political reforms in Czechoslovakia with deep sympathy and understanding, is here with us today.” ついでに付記すると、チェコ軍事介入後、評者たちがオルグして83人の日本人経済学者の署名を集め、介入批判の「公開書簡」をソ連経済学界に送った。ソ連の経済学者から連名ないし個人名の「反論」がたくさん来たが、後にその多くは「書簡」に同感していたことが分かった。

5) 1915-2005。セグドの名家に生まれ同大学卒業後ドイツ留学、大蔵官僚で戦後逮捕拘留されたが、亡命先から帰国した「ポリシェビキ」のなかに、戦後経済再建には良きテクノクラートの協力が要ることを理解していた「開明派」がいて、彼を拘留所に訪れ「われわれに協力してくれたらここから出してやる」と言ったことから彼の「戦後」が始まったという。しかし、彼は1984年になるまで私の前では彼の「母語」同然のドイツ語を話さなかった。

6) 目を潤ませながらアウシュの自殺を教えてくれたのは彼の「論敵」、ソ連のオレク・ボゴモロフだった。

7) 厳密には1938年以前の国内居住ドイツ国籍国民を“Reichsdeutsch”, ヴォルガ・ドイツ人やトランシルヴァニア地方の国外ドイツ人を“Volksdeutsch”という。

8) ここでは歴史家と自然科学者の2つの伝記、ホプズボーム(2004)と藤永(1996)を挙げておこう。オッペンハイマーを取り巻く男女知識人の群像は極めて興味深い。

9) 「それにしても、あの戦後危機の短い一時期は誠に不思議というか、地上の生活は苦しかったのに精神的には『台風の日』のような青空が広がった一時期でした。堀田善衛の小説のタイトルを借りれば『奇妙な青春』でした。長い軍国主義・天皇制支配の時代に対する強い反発と、そのもとで無力だった自分自身に対する痛切な反省から、ありとあらゆる色合いの優れた人たちが一つに合流し、そしてまたそれぞれ違った方向に散らばって行ったのでした。それは多数派だった旧制高校の教養主義・リベラリズムとマルクス主義の特異な『結婚』(弁護士・原後山治の造語)、アマルガムでもありました。この時期にこの『埜嶋』のなかで多くの知的にも、人間的にも優れた友人を知ったことを、私は私の人生の幸福と考えているのです。ひとは『世代』の運命の大きな枠から逃れることは極めて困難です。私のこの報告もその一例証に過ぎないかも知れませんがそれを決して後悔していないのは、こうした友人たちのお陰でもあることを、最後に書き残しておきたいと思います」(佐藤, 1998) (「一九会」とは故・南原繁総長の「オレの時に処分された連中を全部集めろ」で、その他多数を含め最初に集ったのが1月9日だったことから来ている。)

10) 評者は学生時代、何処からか入って来た「文化政策」に関するレーヴェイの独文小冊子を邦訳したことがある。

11) 評者にとっては1952年、チェコにおける「スラウンスキー事件」(ユダヤ人事件でもあった)に連座して国際学連(IUS-ブラハに本部)委員長、ヨーゼフ・グロマンが姿を消したことが一つのきっかけだった。この時、ピンチヒッターの役割を務めたのが後に「ブラハの春」で活動するイジー・ペリカーンで、彼とはチェコ軍事介入後、ローマでしばしば会うことになる。

12) 戦後史の「暗部」に埋められたままだが、朝鮮戦争下、「国際友党」が「後方攪乱」を求めたことが最大の要因だったことは間違いない。この当時、「山村工作隊」に行った後の著名知識人は想像以上の多数に上る。

13) Bobrowski (1956) 参照。ボブrowskiは戦前のポーランド社会党系で戦後、ポーランドで最も成功したといわれる「復興2か年計画」の立案者。本書からの引用はブルスの本にも見られる。

14) 評者たちにとっての「精神的な父」は講座派以来の「修正主義者」井汲卓一だった。通称「井汲塾」は50年代半ば「第二次大戦中のリスボン」のように知的亡命者たちの溜まり場だった。

15) 体制転換後、民主フォーラム政権で対外経済相を務めたカーダール・ベールが予備役中尉のランクを剥奪されたことを教えてくれたくらいである。

16) 評者の古い友人でドイツのリベラル紙 *Die Zeit* の東欧専門大ベテラン記者、クリスチャン・シュミット・ホイヤーは動乱当時15歳の少年マンスフェルド・ペーテルを「成人」になった当日に処刑した「過剰報復」(これは評者が1989年3月、モスクワのIEA国際会議の際、ホテルでの朝食時にコルナイ自身から教えられたことだった)があった一方では、蜂起者間に“Mordlust”(殺人欲/愉楽)があったことを正しく指摘している

(Schmidt-Häuer, 2006a; Schmidt-Häuer, 2006b)。「過剰報復」も「殺人愉楽」のいずれも正当化できるものではない。80年代初め、ただ独りポーランド「連帯」の旗を研究室の壁に掲げていた急進改革派の経済学者、パウエル・タマーシュの父(情報機関の大佐)は「電柱絞首刑」になっている。

17) この時評者は、いわゆる「50年問題」の最中、故・山辺健太郎(『韓国併合小史』岩波新書の著者。のち共産党中央委・統制委員)から面と向かって全く同じ言葉を聞かされたことを思い出した。

18) 評者の場合には1955年のいわゆる「六全協」後、遅れて一旦復帰したが1961年初め、「修正主義者」として一方的な除名通告を受けた。「党の上に個人を置き…」という決まり文句が書かれてあった。本人の聴取抜きで通告だから規約違反で、学生時代からの親友、上田耕一郎は暗い顔で一言、「間違いだね」と言ったが、評者はサバサバとして異議申請の権利も行使しなかった。

19) 前出のカーダール・ベールとサミュエル・ラースローが僅かな例外だった。80年代初め、世界経済研究所長、ボグナール・ヨーゼフが退任、副所長シマイ・ミハイルが昇格した時、彼らは研究所を去ったが、しばらく後にシマイが「情報部門」の大佐だったことを教えてくれた。ボグナールはラーコシとミンゼンティ枢機卿の両方に情報を送っていたという「食えない爺さん」だったが、研究所内のデシデントがかった若手を庇護していた。

20) 「しよせん、カーダール主義もソ連型社会主義が市民社会と『妥協』した形態であって、ソフトな皮を剥いてゆくと党の権力独占という固い『核』が出てくることに変わりはない。」(佐藤, 1977) なお評者はここで社会主義の展望に触れ、5年、10年のタームならともかく「15年、20年となると、ソ連型の体制がそのまま維持できるとは思えない」と前年の1976年、ブダペストで語ったことを書いている。この見通しはやや控え目に過ぎた。

21) チェコ軍事介入の直前には評者はまだ次のように書いていた。「市場機構を“built-in”した社会主義経済が、市場機構の上に計画化が行われるという限りにおいて、現代資本主義における計画化と形態上のある『共通点』を持つのは、少しも怪しむに当たらない。」(佐藤, 1968)

22) ヘビースモーカー、ヘビードリンカーの破滅型だが、ほろ酔い加減の時の議論の冴えと言ったらなかった。1985年6月、議論の最後にアンタルに触れたのは「政治の壁」だった。体制内改革派には体制転換後、安っぽいネオリベラルとなって評者に「見るべきほどのものは見つ」の感を抱かせたものも少なくないが、同時にハンガリーのニエルシュ・レジュエをはじめ“decent”な人々も沢山いたことを評者はここで書き残しておきたい。「旧システム」の作動様式を評者が理解し得たのは、これら「まともな対話の相手」のお陰である。佐藤(1997)「あとがき」参照。

23) 例えばローマー(1997)、伊藤(1995)参照。ただし、周知のようにコルナイは「市場社会主義」の定義を「国有+市場的調整」としてその不可能性を論じているが、この定義はいささカリジッドに過ぎる。80年代の



ハンガリーは国有以外に雑多な所有・経営形態を認めることで「混合経済化」しつつあった。評者は80年代半ばの状況を「市場社会主義への未完の接近」と見なし、それが政治体制の崩壊で『中断』されたものと考えていた。「市場社会主義」とは何か完成された体制として存在するものではなく、「接近」としてのみあり得ると考えていたからである。現中国の経済体制についても同様であろう。

24) 評者がこのような考え方をするようになったのには、1971年にパリで出た『ヴァルガの遺書』(Garaudy, 1971)によるところが大きい。Garaudyは哲学者、チェコ軍事介入反対で除名されたフランス共産党元政治局員。

25) “Plan and/or Market” at the Institut für Wissenschaften vom Menschen, Wien, 15-18 December, 1988.

26) Bogomolov (1990) に全て収録されている。

27) 冒頭に断ったように、本稿ではコルナイ理論の展開には立ち入れないが、便宜上、コルナイの理論的進化の主な段階だけ整理しておく、まずハンガリー経済改革で達成されたものは、家計セクターは「貨幣化」されているが企業セクターは「貨幣化」されていない、「半分か貨幣化されていない」経済システム、「間接的な官僚統制経済システム」と規定、ついで「予算制約のハード化」と「温情主義の削減」とを結びつけて、市場経済を作動させようとしたら、予算制約をハード、温情主義をゼロとし、経済システムを全面的に「貨幣化」しなければならないが、そうすれば伝統的な社会主義理念は維持できない、「効率」の論理と「社会主義倫理」とは両立しない「ジレンマ」に逢着するが解決策は知らない、と論じていた。IEA 会議の前年88年には、論点を少し移して、ハンガリー経済改革は市場機構の作動では期待した成果を上げなかったとしても、所有・経営形態の多様化で「全般的雇用主」としての国家に依存しない階層が生まれたことで「個人的自由」の拡大の面では一定の成果があった、と論じていた (Komai, 1988)。

この間に「パラメーター制御」に対する失望とあわせて市場経済の各種の「シミュレーション」に対する厳しい批判を展開していた。当時盛んだった「利害関心論」(国有企業経営陣に私企業所有者と同じ経営上の関心を持たせる議論)との関連で、「私的所有」のシミュレーションというべきタルドシュ・マールトンの「持株会社」構想を「グロテスク」(p. 291)と批判しているのはその一例である。

評者は経済改革自体を広く資本主義に「内在」する「効率のメカニズム」のシミュレーションと理解していたが、こうしたシミュレーションが期待したように作動しなかったのは事実で、著者の批判は全く正しい。しかし、それが全く「無駄」ではなかったことだけ一言、付け加えておきたい。例えばチコーシュ・ナジが1979年に構想、80年代に実施した「競争的価格システム」(“Competitive Price System”)は外貨換算レートを通じて世界市場価格を国内価格に転移するというもので、マルクス経済学に基づく「コスト・プラス原理」(マル経概念の「価値」を体現すると想定される「部門平均原価」を土台に積み

上げていく価格形成方式)による価格形成システムからの理論的離脱をなすものであった。IEA 会議の席上、評者はこれがマル経からの理論的突破であることは承知しながら、チコーシュ・ナジに“It didn’t work, it didn’t function”となじったことを記憶する。

28) “Taken together, there is a clear tendency toward a mixed economic system (of a ‘socialist type’, as Kornai put it), based on the recognition of the ‘universality’ of the market economy common to modern economic systems, capitalist or socialist....In this connection, the problem of effective macroeconomic policy (regulation) is gaining utmost importance....The difference between capitalist and socialist economic systems might be interpreted eventually not so much in terms of ownership and relations of plan and market, but in terms of effective macropolicy (regulation) exercised over the market with due attention to such values traditionally associated with socialist ideas, as security, stability, equality and solidarity” (Bogomolov, 1990, pp. 254-255). これは極めて「社会民主主義的」な社会主義観であったといえる。評者のこの考え方は、体制転換後、短文ながら佐藤 (1991) に最もコンパクトに示されている。佐藤 (1997) に所収。

29) 評者は1991年度社会主義経済学会第31回大会・共通論題報告「社会主義経済のシステム転換」で、これを敷衍して「われわれの学会は『社会主義者』の学会でもなければ、思想団体でもない。『社会主義』諸国の経済を研究対象とする学会である。だから英文名称は“The Japan Association for the Study in Socialist Economies”となっているのである。研究対象がどんな定義にしようとも『社会主義』でなくなりつつある以上、名称変更はきわめて当然のことではあるまいか」と主張した(佐藤, 1992, p. 14)。しかし、名称変更は1992年度第33回大会でも賛成30：反対33：保留7で否決された。

30) 評者は49歳で世を去るまで「党籍」はあったはずの岡さんが評者と目に見えない連係で教条派に対抗してくれたことを終生、忘れないだろう。ここで名前をあげない何人かの方にも同じく感謝したい。評者とほぼ同じ文脈で富田武が「中ソ論争以降の日本における社会主義論は概して、第一に、ソ連がダメなら中国、あるいはユーゴ、あるいはキューバ、そして北朝鮮にさえもモデルを求める傾向が生じた」(富田, 2006)と批判しているのは、辛辣ながら誠に適切である。

31) コルナイ論文 (Komai, 2005) はタイトルからして分るように、これに答えようとしたものだが、“success” “disappointment”を峻別することで両者を両立させているところに論議の余地を残していると思う。

32) 本書は「崩壊」したというだけでその体制分析を「弊履」のごとく放棄する安易な潮流に抗し、自分自身の『社会主義』との関わりと「軌跡」の整理をも絡めて体制の「再把握」を意図した、類書の無い労作である。なお、この用語がルードルフ・バーロの「現実中存在する社会主義／現存社会主義」(“real-existierender Sozialismus”) (Bahro, 1977) (『朝日新聞』1981年3月2日号に評者の書評がある) から来ていることは自明であろう。バーロはこれを「体制批判」の用語として使ったが、ブ

レジネフ時代ソ連の「現実社会主義」(real'nyi sotsializm)は「居直り」の概念であった。塩川(1999)に対する稲葉振一郎の批評は極めて興味深い (<http://www.meijigakuin.ac.jp/~inaba/books/bks9910.htm>)。稲葉はまた別の個所で社会主義が「自己否定」してしまったため「代替的」体制論に至難となったことも鋭く指摘している。

33) 比較経済体制学会2006年度大会におけるフィル・ハンソンの報告 (Hanson, 2007) は必ずしも成功しなかったとはいえ、示唆するところが大きい試みであった。新規 EU 加盟国の一部にアングロ・サクソン型資本主義モデルへの接近が見られるという指摘や、比較経済体制論の「カヴァレッジ」を十分考慮することなく個別問題研究に向かう傾向に警告を発した点は適切だったが、堀林 (2007) を除き正面から受け止められなかったようである。

## 参考文献

- 伊藤誠 (1995) 『市場経済と社会主義』平凡社。  
佐藤経明 (1968) 「経済改革と誘導市場モデル」『経済評論』7月号。  
—— (1977) 「政治と経済のはざままで」『経済評論』9月号。  
—— (1981) 「退学復学前後—私の山田盛太郎先生追想」『経友』No. 91, 9月号, 東京大学経友会。  
—— (1991) 「『非市場経済』という幻像」『朝日ジャーナル』9月13日号。  
—— (1992) 「社会主義経済のシステム転換—『改革』から『離脱』へ—」『社会主義経済学会会報』第29号。  
—— (1997) 『ポスト社会主義の経済体制』岩波書店。  
—— (1998) 「世代の運命の一例証」『一九会文集』第三集, 原後綜合法律事務所。  
—— (2000) 「草創期の頃」比較経済体制学会『学会30年の歩み—20世紀を振り返って—』。  
—— (2005) 「社会主義体制の崩壊から15年—現時点で考える」『日曜クラブ』No. 451, 7月30日号。  
塩川伸明 (1999) 『現存した社会主義—リヴァイアサンの素顔』劉草書房。

- 富田武 (2006) 「スターリン批判と日本の左翼知識人」『季刊・現代の理論』夏季号。  
藤永茂 (1996) 『ロバート・オッペンハイマー—愚者としての科学者』朝日選書。  
ホブズボーム, エリック (2004) 『わが20世紀・面白い時代』(河合秀和訳) 三省堂。  
堀林巧 (2007) 「比較政治経済学と中東欧の資本主義」『金沢大学経済学部論集』第27巻, 第1号。  
マルクス, ジョルジュ (2001) 『異星人伝説—20世紀を創ったハンガリー人』(盛田常夫訳) 日本評論社。  
ローマー, ジョン・E (1997) 『これからの社会主義』(伊藤誠訳) 青木書店。  
Bahro, Rudolf (1977) *Die Alternative: Zur Kritik des real existierenden Sozialismus*, Köln: Bund-Verlag。  
Bobrowski, Czeslaw (1956) *Formation du Système soviétique de la Planification*, Paris: Mouton & Co.  
Bogomolov, Oleg, ed. (1990) *Market Forces in Planned Economies: Proceedings of a Conference Held by International Economic Association in Moscow, USSR*, London: IEA and McMillan。  
Garaudy, Roger, ed. (1971) *Le Testament de Evgenii Varga*, Paris: Edition Le Seuil。  
Hanson, Philip (2007) The Tasks Ahead in Comparative Economic Studies: What Should We Be Comparing?, 『比較経済研究』第44巻, 第1号。  
Kornai, Janos (1983) The Health of Nations: Reflections on the Analogy between Medical Sciences and Economics, *Kyklos*, Vol.36, No.2。  
—— (1988) Individual Freedom and the Reform of the Socialist Economy, *European Economic Review*, Vol.32, No.2-3。  
—— (2005) *The Great Transformation of Central Eastern Europe: Success and Disappointment*, Presidential Address, delivered at the 14th World Congress of International Economic Association (IEA) in Marrakech, Morocco, August 29。  
Schmidt-Häuer, Christian (2006a) Märtyrer und Lügenbolde, *Die Zeit*, Nr. 43, 19 Okt。  
—— (2006b) Helden und Henker, *Die Zeit* Nr. 44, 26 Okt。